

Part 7
JAPAN
ALPINE
SKI TEAM
日本チームの戦い

視界は 開けるか？



08/09シーズンの日本チームは、この10年来で最悪のスタートとなつてしまった。年内のワールドカップで獲得したポイントはゼロ。年明け最初のスラローム第3戦で皆川賢太郎（アルビレックス新潟）が23位、続く第4戦で湯浅直樹（スポーツアルペン）が19位と立て続けに下位入賞を果たしものの、やはりその成績は寂しいと言わざるを得ない。

最大の誤算はエースの佐々木明（JM）の不調だろう。開幕前には絶好調を伝えられたものの、スラローム第1戦で途中棄権。その後は、トレーニング中のクラッシュで肋骨を負傷。12月後半は痛みのために身体に力が入らず、ほとんど練習もままならない状態が続いた。クリスマスから年末にかけての休養を挟んで、状態は少しずつ良くなっているというが、ザグレブ、ア



上/肋骨を傷め調子の上げられない佐々木明。乱視の彼にとって、ザグレブでは深い霧という思いがけぬ敵とも戦わなくてはならなかった
下/デビュー戦から2レース続けて完走の大越龍之介。チーム内でも「なかなかの大家」という声が高い

デルボーデンとともに結果を残すまでには至っていない。年末には、「スキークロスにも参戦」という新聞報道が流れて話題となったが、本業のアルペンで結果を出さなければ、ことはそう簡単には進められないだろう。
もともとスロースターターぞろいの日本チーム。今季の立ち上がりの悪さには、それぞれはつきりとした理由がある。レース結果のひとつひとつに一喜一憂するのは早計だろう。まずは、それぞれが抱えている問題を解決することが先決だ。

ひとつ心配なのは、ワールドカップのスラロームが1月に集中していることだ。ザグレブの第3戦からガルミッシュ・パルテンキルヘンの第8戦までわずから週間の間に6レースが消化される。この間で調子を上げないと、残されたレースはヴァル・ディ・ゼール世界選手権とクラニスカ・ゴラでのワールドカップ第9戦のみ。できるだけ早い時期の立て直しが必要なのは、言うまでもないだろう。幸い、佐々木、皆川、湯浅の3人も調子は上向きなので、その流れを維持することを望みたい。

明るい話題のひとつは、20歳の新鋭大越龍之介（北海道東海大学）の健闘だ。初のワールドカップ出場となったザグレブで1本目41位（3秒66遅れ）、続くアデルボーデンでは44位（4秒61遅れ）と連続して完走している。ともに上位との差は大きいものの、しぶとくゴールまで持ちこたえたのは立派。今はまだ経験を積む段階。順位よりもその過程を優先すべき時期だが、この年代では世界のトップクラスにすることはまちがいない。今後順調に伸びてほしい逸材と言えるだろう。